



教会短信

2011年8月7日

No. 40

牧師 間淵 善彦

3月19日から1ヶ月間当教会に避難され、その後南相馬市に帰宅されたご家族の所へ教会員2名と訪問しました。訪問したと言っても、何かのお手伝いをして来たということではありません。原発から23キロ、放射能汚染のため緊急時避難準備区域に指定され、命の危険が絶えずあるにもかかわらず、そこに住み続けなければならない方たちの苦しみはどのようなものなのだろうか。体験した人にしかわからない苦しみに、体験したことのないわたしは、どのように依り添えばいいのであろうか。そのような心の問いから発せられた訪問でありました。

このご家族が、当初グループホームにしようとして計画して建てたアパートが、手続上の問題で頓挫していました。ところが、震災で自分の家を失ったり、家があっても計画的避難区域となり、住む場所を失った方たちの住まいとして活用されていると聞き、多くの人びとを快く迎え入れるこのご家族の懐の深さにも感銘を受けていたからです。

あらかじめ教えていただいていた通り、二本松インターで降り、川俣町、飯館村を通り、峠越えをして南相馬市に入っていました。川俣町も飯館村も放射能が強い所です。一見緑豊かで美しく見える風景の中にも、見えない放射能によって脅かされ、避難せざるを得なくなった、明らかに人が住んでいないとわかる家、草ぼうぼうの田畑は、異様な光景でした。今回訪問した所は浜通りで、原発に近く放射能が強いながらも、内陸部に比べて数値がやや低い場所です。

聞いた通り、アパートには被災者が4、5家族避難されておられました。神はグループホームの計画を先に伸ばされ、その間このアパートを避難者のアパートとして用いられたのです。人間の計画に先立つ、神の計画があったことを知ります。

久しぶりの再会を喜び、建物を見学させていただいた後、車で被災地を案内してもらいました。国道6号線の20キロ区域通行止めのゲートには、警察官が立っておられ、熱い炎天下頭が下がる思いでした。津波による被害地、「かいはま」（萱浜？）という地区は、元のどかな漁村、海水浴場だった所です。堤防が破砕され、何もなくな荒涼とし、所々に壊れて住めなくなった家、破壊されたものが山のように集められてありました。この地区に暮らしておられた方たちは一体どうなったのでしょうか。

聖書に、イエスは村々に救いを伝えるために回られている時、民衆が「打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた」（マタイ 9:36）とありますが、この「憐れむ」は ^{はらわた}腸 が干切れるほどの強い、心の痛みを意味します。わたしも少しでもこの思いに近づくことができたらと思います。

空の鳥を見よ、野の花を見よ



ごらん空の鳥、野のゆりを
まきもせず、つむぎもせずやすらかに生きる
こんな小さな命さえ、心をかける父（神）がいる。

マタイ 6:26



聖書の中に上記の聖句があります。私はこの聖句を読むとホッとします。私達の住んでいる世界には神の大いなる恵みと愛が満ちあふれています。大自然の中で養われている鳥たちは木から木へと飛びまわり、木の実を食べ、池の水を飲んで生きています。野の花は天からの恵みの雨をいただき、太陽の光を十分に浴びて、土の中からは土の養分をいただいて美しく咲いています。神さまは、同じように私たち人間にも必要なものをすべて備えてくださっています。しかし、私たち人間は神さまから備えられているものに満足しないで生活しているのでしょう。

私の幼い頃を思い出します。夕食の後は板台に腰かけ、蚊に刺されないようにウチワであおぎながら体を冷やしてから寝ていました。食卓のおかずはレンジなどない時代ですから、母の作った煮物や豆腐料理でした。おいしくないと思ったことなど一度もありませんでした。でもその後、電家製品が出まわり生活が便利になりますと、私はもっと便利な、そしてもっと生活レベルを上げたいと思うようになったのが現実です。

4ヶ月前、3月11日のあの震災で大切な家族を失った方々のことを思いますと心が痛みます。家を失った方、原発で自宅に戻れない方々が仮設住宅にも入れず、避難所の中は35°、36°という気温の中でエアコンも無く過ごしていらっしゃいます。テレビの放映でそのお姿を観るたびに、この方々は皆私たちの、いや私の便利さを求めた罪の犠牲になってくださっているのだと思い、申し訳なく思っています。私もこれからは出来るかぎり贅沢をしないで生きていこうと誓う毎日です。

被災地を訪ねて

7月中旬に原発から約23キロ離れた南相馬市の知人を訪ねた。東北道は、青い山々や緑の森林に囲まれて美しかった。だが、放射線量が比較的多く、住民の80%が村外に避難している飯館村に入ると、山の樹木は伸び放題、農家の方々が野菜などを大切に育てていた広い畑には、あちらこちらに雑草が生えたままになっていた。見渡すかぎり、人の姿はなかった。

やがて南相馬市の知人の家に着いた。私たちは、その知人と家族の案内で被災地を訪れた。海に面した広大な土地は、きれいに片づけられていた。まとめて積み重ねてある波消しブロック、破損した車、建造物の一部、鉄骨の柱の残骸が、分類されてあちらこちらに置かれていた。

3月10日まで、ここには、たくさんの家族の平和な暮らしがあった。今は見渡す限り誰もいない。私たちは言葉を失った。

原発から20キロの「立ち入り禁止区域」の入口には、警察官が一生懸命旗を振って通行止めの仕事をしていた。人の命を守るために炎天下で必死に働き続ける彼らの姿が、私に唯一の希望を与えてくれた。

T. K.

ボランティア活動を通して

7月27日から29日にかけて、宮城県東松島市にてボランティア活動に行ってきました。

私が活動した場所は、海から2kmも離れた地域で、比較的被害は少なかったのですが、それでも家々の壁には2m以上の高さに津波の痕がくっきりと残っていて、半壊を免れなかった家屋も多く見られました。私はそこで、1階部分を津波で破壊されたお住まいを復旧しようと、懸命に努力されているご家族や、体力的な問題から復旧出来ずにいる老夫婦のお宅で支援活動を行いました。

3日間を通して知り合った被災地の方は、皆さん努めて明るく、粘り強く復興に取り組んでいて、ボランティアに行った私の方が逆に元気を貰うくらいでした。実際に見てきて、そうした現地の方々や、ボランティアの方々の努力によって、着々と復興が進んでいる事がわかりました。しかし同時に、完全復興には、まだまだ時間がかかるということもわかりました。

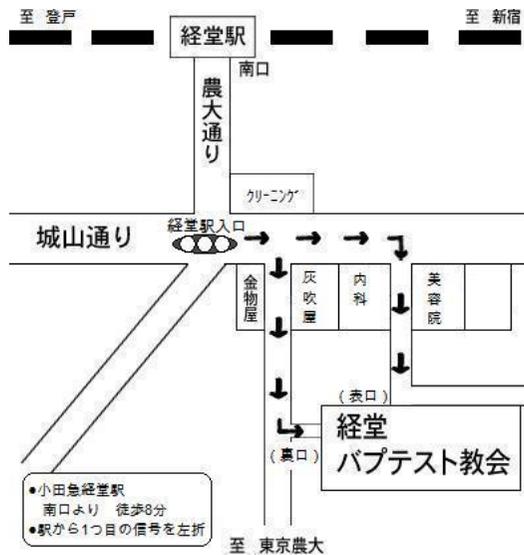
海の近くでは、ところどころに家の門だけを残して、雑草に覆われ草原と化した住宅地がありました。他にも墓石がめちゃくちゃに散乱した墓地、山のような瓦礫、半分^壊壊り取られた形で建っている家屋を見て、継続した支援、ボランティアの必要性を強く感じました。

ボランティアといっても私たちが出来ることは地味なことばかりです。しかし被災した人々の中には、被害規模の大小にかかわらず、私たちが代わることのできない悲しみや苦痛を抱えている人も大勢いるでしょう。ですから、どれだけ地味なことでも、そうした人たちの代わりに私たちが汗を流し、休息をとって頂くだけでも有意義なことだと、私は今回の活動を通して感じました。

Y. N.

日曜日は教会へ集会案内

主日礼拝	日曜日	午前10時30分～11時30分
教会学校	日曜日	午前11時45分～12時30分
	青年科・成人科	
聖書を学ぶ会	火曜日	午後 1時30分～ 2時30分
聖書研究・祈祷会	水曜日	午後 7時30分～ 8時30分



経堂バプテスト教会

牧師 間瀬 善彦

〒156-0053 世田谷区桜1-64-30

TEL 03-3427-2352

※当教会はプロテスタント教会です。

エホバの証人、モルモン教、統一協会などとは異なります。